

なるほど！うみはく
 人生いろいろ、船もいろいろ
 ～人と海との知恵くらべ～

市立海の博物館 ☎ 6006

vol. 17

辞典の『広辞苑』で「船」をひくと、「木材・鉄などで造り、人や物をのせて水上を渡航するもの」とあります(小型のものは「舟」とすることもあります)。「など」とありますから、材料はなんでもよいのでしようが、つまり水上を移動するために乗るものは、すなわち「船」と規定できることになります。

人類は古来、まだ見ぬ土地を探して、また眼前に広がる豊饒の海から食料を得るため、苦心しながらも知恵をめぐらせて船を創り出し、水上に漕ぎだしてきました。最も原始的な船は、偶然折れたり、自分たちで伐った木をそのまま水に浮かべてつかまり、自分の手で漕いで進んだのが始まりではないかと思えます。



これはただの“板”なのでは？

いま、わたしたちが「船を描いてください」と言われたら、多少の大小や形状の違いはあっても、おおむね共通したものをイメージすることでしょう。しかし、世界中に広がる長い船の歴史のなかで、人類は今日のわれわれが予想だにしない形状、材質、用途の船を数多く生み出してきました。

例えば、東南アジアのベトナムなどでいまでも使用される「トエントン」という船があります。これは直径2メートルほどもある大きなザル型の船で、陸に近い波が穏やかなところで、人や物を短い距離運んだり、イカ漁などに用いられます。

ところでザルを水に浮かべようとしても、網目のすき間から水が入ってきて沈んでしまつたのでは？と思つたかたはいないでしょうか。心配ご無用です。すき間はなんと、ヤシ油を混合させた牛のフンで埋めています(牛のフンはヤシ

シ油と混ぜると固まる性質があります)。おそらく混ぜた状態のものが、昔に偶然発見されて活用されるようになったのではないかと思えます。東南アジアやインド周辺では、牛のフンは肥料のほかにも虫よけや建築材料、医療品、研磨剤などさまざまなものに有効利用されています。ちなみに日本の神話やおとぎ話には、南洋から黒潮に乗って人が移動してくることで伝わったと考えられるものがたくさんありますが、このトエントンは、一寸法師のお椀の船のモデルになったとも言われます。

世界各地の船を見ていると、海上交通や海産物の漁獲など、人が海と密接に、かつ伝統的に関わってきた歴史がよくわかりますし、同時にどのように使うのか？どんな材料で作っているのか？といった視点で見てもらうと、使用されていた地域の漁業文化や生活習慣、風土を感じられます。特に一見変わった船ならば、それらのことがより楽しく学べるはずですよ。

企画展
「アレも船？コレも船？」

わたしたちが一般的にイメージする船とは形が異なる、一風変わった船たちを、海の博物館で所蔵している実物資料と、写真パネルで紹介いたします。

会期 令和4年12月31日(土)～令和5年4月9日(日)
 ※会期中は館内工事のため、一定期間休館となる場合があります。



そばが500人前入りそうなザルの船「トエントン」

年末年始イベントのお知らせ

年末年始は海の博物館で見て、作って楽しみましょう。

●**魔除けのアラクサをプレゼント**
 令和4年12月31日(土) 先着50組

●**貝殻や海藻を使ったクラフト体験**
 令和4年12月31日(土)～令和5年1月4日(水) 午前10時～午後3時(事前申込不要)



貝殻入りのジェルキャンドル

●**海の七草粥おふるまい**
 1月7日(土) 午前11時～(材料が無くなり次第終了)
 鳥羽市国崎に伝わる、海藻を用いた七草叩きをヒントにした、海の博物館特製の海藻入り「七草粥」を食べて、今年一年の無病息災を祈りましょう。



海の博物館特製の海藻入り「七草粥」